

2016年3月期中間決算について

- 2016年3月期(2015年度)中間連結決算は、前年同期比「増収増益」。航空機発着回数、国際線及び国内線発着回数、航空旅客数、国際線外国人旅客数、国内線旅客数は開港以来過去最高を記録。航空機材の平均着陸重量減少等により空港使用料収入は伸び悩んだが、消費意欲の旺盛な国際線外国人旅客の増加等に伴い、旅客施設使用料収入、物販・飲食収入、構内営業料収入が増加し、営業収益は増収、営業利益、経常利益、親会社株主に帰属する中間純利益ともに増益。
- 通期連結業績予想は「増収増益」の見通し。5月15日発表の予想から、営業収益、営業利益、経常利益、親会社株主に帰属する当期純利益いずれも上方修正となり、営業収益、経常利益、親会社株主に帰属する当期純利益は民営化以降の過去最高を更新する見通し。

1. 航空取扱量について

区 分	中間期(4月1日～9月30日)				通期(4月1日～3月31日)				前回見通し (5月15日 発表)
	2014年度 実績 A	2015年度 実績 B	【増減①】		2014年度 実績 C	2015年度 見通し D	【増減②】		
			数 量 B-A	% B/Ax100			数 量 D-C	% D/Cx100	
航空機発着回数(万回)	11.6	11.8	0.2	101.6	22.8	23.5	0.7	102.9	23.5
国際線	9.0	9.1	0.1	101.5	17.8	18.3	0.6	103.2	18.2
国内線	2.6	2.7	0.1	101.9	5.1	5.2	0.1	102.0	5.2
航空旅客数(万人)	1,793	1,931	139	107.7	3,531	3,692	162	104.6	3,595
国際線	1,487	1,576	90	106.0	2,930	3,027	97	103.3	2,937
国内線	306	355	49	116.0	600	665	65	110.8	659
国際航空貨物量(万トン)	102	100	▲2	98.0	208	200	▲8	96.2	205
給油量(万kl)	235	230	▲6	97.6	462	456	▲5	98.9	458

(1)2015年度中間期の実績【増減①】

- 航空機発着回数は、アジア路線を中心とした国際線や国内線LCCの新規就航、増便等によって、前年同期に比べて増加、4期連続で開港以来最高値を更新。
- 航空旅客数は、中国など中華圏を中心とした国際線外国人旅客及び国内線旅客が増加したことから、前年同期に比べて増加、2期ぶりに最高値を更新。
- 国際航空貨物量は、中国経済の減速等で輸出、輸入が減少し、前年同期に比べて減少。
- 給油量は、近距離小型機材路線が増え長距離大型機材路線が減少したことから、前年同期に比べ減少。

(2)2015年度通期の見通し【増減②】

- 航空機発着回数は、新規就航、増便等により国際線、国内線ともに増加し、前期を上回る見通し。
- 航空旅客数は、国際線外国人旅客が好調なことに加え、国内線旅客も増加し、前期を上回る見通し。
- 国際航空貨物量は、期末にかけ米国港湾荷役遅延による特需のあった前期を下回る見通し。
- 給油量は、機材の小型化等により、前期を下回る見通し。

2. 連結決算について

(単位:億円)

区 分	中間期(4月1日～9月30日)				通期(4月1日～3月31日)				前回予想 (5月15日 発表)
	2014年度 実績 A	2015年度 実績 B	増 減		2014年度 実績 C	2015年度 予 想 D	増 減		
			金 額 B-A	% B/Ax100			金 額 D-C	% D/Cx100	
営業収益	1,000	1,128	127	112.8	2,031	2,172	140	106.9	2,106
営業利益	219	257	37	117.2	387	404	16	104.4	362
経常利益	191	236	45	123.7	333	356	22	106.8	307
親会社株主に帰属する 中間(当期)純利益	115	154	39	134.1	196	231	34	117.5	202

(注)業績予想は、当社が現時点で想定した航空取扱量に基づき作成したものであり、不確定要素を含んでおります。

(1) 経営成績の概要

営業収益は 1,128 億円（前年同期比 127 億円、12.8%増）、営業利益は 257 億円（同 37 億円、17.2%増）、経常利益は 236 億円（同 45 億円、23.7%増）、親会社株主に帰属する中間純利益は 154 億円（同 39 億円、34.1%増）の「増収増益」

- 空港運営事業： 航空機発着回数は増加したものの航空機材の平均着陸重量が減少したこと等により空港使用料収入、給油施設使用料収入は減収となったが、国際線、国内線ともに航空旅客数が増加したこと等により旅客施設使用料収入が増収となったことから、営業収益は前年同期比 1.4%増の 524 億円、第 3 旅客ターミナルビルの供用による費用の増加もあって営業利益は前年同期比 6.3%減の 46 億円となり、「増収減益」。
- リテール事業： 国際線外国人旅客の増加、第 3 旅客ターミナルビルの供用開始、店舗増床・リニューアル等により、子会社の物販・飲食収入及び一般テナントからの構内営業料収入が増加し、営業収益は前年同期比 39.4%増の 435 億円、営業利益は前年同期比 43.6%増の 135 億円と「増収増益」。
- 施設貸付事業： 貨物ターミナルビル貸付の解約等により営業収益は前年同期比 1.4%減の 154 億円、営業利益は前年同期比 1.2%減の 72 億円と「減収減益」。
- 鉄道事業： 営業収益は前年同期比 0.2%減の 14 億円。営業利益は前年同期比 9.7%増の 3 億円とほぼ前年並み。

(2) 財政状態の概要

- 資産合計は、第 2 旅客ターミナルビル本館・サテライト間連絡通路整備等の設備投資はあったものの、減価償却が進んだことによる固定資産の減少等により前連結会計年度末比 172 億円(2.0%)減の 8,485 億円。
- 負債合計は、未払金の減少等により前連結会計年度末比 267 億円(4.6%)減の 5,605 億円。有利子債務残高は、同 7 億円(0.1%)減の 4,644 億円。(平均金利は前連結会計年度末から大きな変化はなく 1.19%。)無利子債務を加えた長期債務残高は、同 7 億円(0.1%)減の 4,920 億円。
- 純資産合計は、前連結会計年度末比 95 億円(3.4%)増の 2,879 億円。自己資本比率は、前連結会計年度末の 31.1%から 32.8%へ増加。

(3) キャッシュ・フローの概要

● フリー・キャッシュ・フローは 7 億円のキャッシュ・イン(前年同期比 56 億円の減少)

- 営業活動によるキャッシュ・フローは、税金等調整前中間純利益の増加等により前年同期比 31 億円増の 327 億円のキャッシュ・イン。
- 投資活動によるキャッシュ・フローは、固定資産の取得による支出の増加等により前年同期比 87 億円増の 319 億円のキャッシュ・アウト。
- 財務活動によるキャッシュ・フローは、長期借入金の返済による支出等により前年同期並の 66 億円のキャッシュ・アウト。

(4) 通期の連結業績予想

営業収益は 2,172 億円（前期比 140 億円、6.9%増）、営業利益は 404 億円（同 16 億円、4.4%増）、経常利益は 356 億円（同 22 億円、6.8%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は 231 億円（同 34 億円、17.5%増）の「増収増益」見通し（営業収益、経常利益、親会社株主に帰属する当期純利益は民営化以降の過去最高を更新）

- 航空機発着回数、航空旅客数ともに増加、特に国際線外国人旅客数の増加に伴うリテール事業の増収が大きく寄与し、営業収益は増収、営業利益、経常利益、親会社株主に帰属する当期純利益いずれも増益の予想。
- 前回業績予想(5月15日発表)から、営業収益は 66 億円(3.1%)増、営業利益は 42 億円(11.6%)増、経常利益は 49 億円(16.0%)増、親会社株主に帰属する当期純利益は 29 億円(14.4%)増といずれも上方修正。

以上